

An Independent
Interview Magazine

BUILD UP!!

Feb 2026
#03

電池研究者からクラフトビール店主へ。 分野を越えた挑戦のなかで、変わらない 研究への姿勢

第三回目のピックアッププレイヤーは、東京都稲城市でクラフトビールを販売している“Hoppee”（ホッピー）の店主、田中慶一朗さん（以下、田中／敬称略）です。今回はお店を始めてからのお話だけでなく、開業前のことや生い立ちについても伺いました。ぜひビールを片手に、ゆっくりとご覧ください。

——まずは、田中さんの生い立ちを教えてください。

田中：生まれは新潟県です。生まれてすぐに東京都東大和市へ引っ越しました。

——学生時代はスポーツなどをされていたのでしょうか。

田中：部活動程度ですが、中学生の頃はサッカー部でした。高校は東京都立武蔵野北高等学校に進学したんですが、実はその学校が『スラムダンク』（バスケットボール漫画）のモデル校なんです。しかも、僕が高校生の頃はちょうど連載真只中で、「これはバスケット部に入るしかないな」と思って入部しました（笑）。ただ、高校1年の夏前くらいで退部しました。

——何か理由があったのでしょうか。

田中：実は肺に穴が空く病気を患ってしまって、手術を2回しています。手術は無事に終わったのですが、顧問の先生から「危ないから田中は試合に出さない」と言われて、やむを得ず辞めることになりました。

——その後、他のスポーツはされましたか。

田中：団体スポーツはバスケットで終わりましたが、その後はスケートボードやダンスをやっていましたね。

——高校卒業後は、どのような進路を歩まれたのでしょうか。

田中：理系大学の化学科へ進学しました。卒業後はそのまま就職するつもりでいたんですが、いざ就職活動してみると、なかなか希望の企業に入れなくて。そこで自分自身について、いろいろ考えるようになったんです。

——考える中で、どんな気づきがありましたか。

田中：（自分には）何もないな、と思ったんです。特色も強みもない。これは一度立ち止まらないといけないな、

と。このままではいけないという思いもあって、もう一度しっかり勉強しようと大学院への進学を決めました。その時に、親戚の叔父との会話を思い出したんです。

——どんな会話だったのでしょうか。

田中：「なんで大学に進学するんだ？」と聞かれたことがあって。僕は当時から“電池（エネルギー）”に興味があったので、エネルギーが生まれる仕組みやメカニズムを学びたいと答えました。その会話を思い出して、改めて電池について深く学ぼうと。特にリチウムイオン電池や燃料電池を研究したいと思い、電池で有名な先生がいる大学院に進学しました。

——電池やエネルギーに興味を持ったきっかけは何だったのでしょうか。

田中：高校生頃に、SONYからaiboという家庭用ロボットが発売されたんです。aiboは電池を入れて動くんですが、人間や動物とは違い、ロボットは電池というエネルギーを“食べて”動いている。その違いがなんだか、不思議で印象に残ったんです。その感覚がずっと心に残っていて、気づいたら興味が変わっていました。

自分で作った電池で何か動かしたいなと。

——大学院修了後は、どのような企業に就職されたのでしょうか。

田中：電池やテープ、CDなどを製造している会社に就職しました。当時は電池を事業の中心に置いていたので電池メーカーと呼んでもいいかもですね。そこで、電池の製品開発部へ入ることができました。

——「何もない」と感じたところから、電池メーカーに就職されたのはすごいですね。社会に出てみていかがでしたか。

田中：当時はまだリチウムイオン電池の普及率も低く、実用実績も少ない時代でした。業界としては、これからというタイミングだったんです。一方で、僕は大学院でリチウムイオン電池を研究していたので、ある程度の知識がありました。学んだことがそのまま武器になって、業界で通用したのは嬉しかったですね。

田中 慶一朗さん

新潟県出身。東京都東大和市育ち。理系大学卒業後、電池研究者として約20年キャリアを積む。2024年、クラフトビール店“Hoppee”を開業。



——その後のキャリアについて教えてください。

田中：最初の会社には約5年勤め、その後、別の化学メーカーに転職しました。リチウムイオン電池をはじめ、さまざまな材料を扱う会社で、約12年電池材料の研究開発を行ってきました。

——ここから、クラフトビールにどう繋がっていくのでしょうか。

田中：その会社で語学研修の社内公募があって、研修先がアメリカだったんです。「とりあえず応募してみよう」と思って応募したら、応募者がまさかの2名（笑）。そのまま通って、3ヶ月間アメリカに行くことになりました。

——何かが起きそうな予感がしますね。実際に行ってみてどうでしたか。

田中：英語に自信がなかったのも、とにかく現地の英語に触れようと思ってビアバーに行きました。そこで、日本では飲んだことのない、苦味の強いビールや個性のあるビールに出会ったんです。それがすごく新鮮で、面白かった。

——田中さんとビールの最初の化学反応ですね。

田中：そうですね。それまで飲んでいたのは、スーパーやコンビニで買える一般的なビールばかりでした。でもアメリカのビアバーには、本当にたくさんの種類があって、衝撃でした。それと同時に、自分の環境についても考えるようになりました。

——どんな環境についてでしょうか。

田中：大学院から数えると、約20年近くリチウムイオン電池に関わってきました。もちろん好きな業界ですし、世界を支えているという誇りもあります。ただ、正直なところ、少しマンネリも感じていて。リチウムイオン電池は進化し続けていますが、10年前と比べて劇的な変化があるかと言われると、そうでもない。当時は「自分が思い描いていたほど大きな絵を描けていないな」と感じていました。

——20年近く一つの分野を追い続けるのもすごいことですね。

田中：そうですね。ただ、スマートフォンへの採用、そして電気自動車の誕生によって電池の使用環境は大きく変わり、求められる性能や生産方法も大きく様変わりしました。それに適応するために、日々まったく違う課題に向き合う必要がある時代でもあったと思います。その意味では、「同じ分野を20年続けてきた」というよりも、変化に追われながら、常に学び直してきた20年だったという感覚のほうが近いかもしれません。技術も常識も更新され続ける中で、自分自身も変わり続けることを求められてきましたし、その積み重ねが今につながっていると感じています。その後、語学研修の経験もあって、研究職から営業職に異動し、アメリカ市場向けプロジェクトのリーダーに抜擢されました。

——大きな転機ですね。その後はどうなったのでしょうか。

田中：ずっと開発や研究をやっていたので、自分の中ではかなり大きな出来事でした。でも、いざ始めてみると、研究開発の時に見ている景色とそれほど違いはなくて。「このまま5年後、10年後も変わらないんじゃないか」と感じました。約3年考え抜いた末に出した答えが、「仕事を辞めて独立する」という選択でした。

——独立すると決めた時、最初からクラフトビールだったのでしょうか。

田中：いえ、「クラフトビール」か「醤油」の二択で考えていました。

——醤油、意外ですね。

田中：アメリカで食べた醤油が、あまり美味しいと感じなかったんです。日本食が恋しくなる中で、「やっぱり醤油って大事だな」と思うようになって。実際に日本に帰ってから、自分で作ってみたり、老舗の醤油蔵を巡ったりしました。

——実際に作ってみてどうでしたか。

田中：驚くほど味が違いました。基本は水・大豆・塩だけなのに、香りやまろやかさも全然違う。それがすごく面白かったですね。

——それでも最終的に醤油ではなく、クラフトビールを選ばれた理由は？

田中：醤油はとても魅力的でしたが、事業としての全体像を描き切れなかったんです。なかなか醤油切らさないじゃないですか（笑）その点、ビールであれば気軽に飲んで楽しんでもらえるのかなって。醤油は日本が世界に誇る伝統食品だと、改めて強く感じていたのでかなり最後まで悩みましたけどね。

——お話を伺っていると、好奇心や探究心がとても強い印象です。

田中：そうかもしれません。アメリカに行きたい、醤油を調べてみたい、クラフトビールの世界をもっと知りた。そういった好奇心の積み重ねが、今に繋がっていると思います。アメリカに行った時、子どもは2歳だったんですが、人生経験になると思って、妻に相談したんです。今も当時も、妻のサポートがあってこそ。感謝しかないですね。

——奥さんの存在は大きいですね。

田中：本当にそうです。常に支えてくれて、背中を押してくれています。子どもの存在も大きいですね。成長を見守りながら、「もっと頑張ろう」と思わせてくれます。

——事業を始めるにあたって、特に大変だったことは何ですか。

田中：一番最初は免許の取得です。お酒を販売するために、酒類販売業小売免許というものが必要でした。それには、『人的要件』『場所的要件』『経営基礎要件』の3要件を満たす必要がありますが、兎にも角にも、まず販売場所の確保が必須でした。でも、店舗探しに時間がかかって、申請できるまでに半年ほどかかりました。

——稲城市を選ばれた理由は？

田中：多摩川周辺に素敵なビール工場があることは知っていて、ここで何か形にできないかと思ったんです。近隣で探していく中で、今の店舗に出会いました。

——仕入れはどのように行っているのでしょうか。

田中：問い合わせフォームを使うこともできますが、僕は実際に現地に行って会うことを大切にしています。イベントやマルシェにも足を運んで、直接話を聞く。会えばお互いの雰囲気も分かりますし、距離感も掴めますから。

——稲城長沼という街に、どんな印象を持っていますか。

田中：年に数回ビールイベントがあって、そこでいろいろな方とビールの話ができるのが楽しいですね。普段も地元の方がふらっと立ち寄ってくれて、近況報告したり。お店を始めて一年が経ちましたが、こうしたコミュニティが育っているのは、この街ならではの魅力だと思います。

——開店から一年。振り返ってみていかがですか。

田中：最初に描いていた理想とは程遠いですが、でも、挑戦したからこそ見えたものがありますし、そこからまた修正して次に進みたい。何より、あつという間の一年でした（笑）。悩むことも多いですが、新しい出会いや

繋がりが生まれ、多くの人に支えていただいた、かけがえのない一年だったと思います。

——異業種への挑戦をされたわけですが、化学メーカーで働いていた際の知識や経験は活かされていますか。

田中：大きな目標は、簡単には達成できません。研究職時代に培った「目標を立て、その目標に向かって仮説を立て、課題を一つずつ解決しながら前に進む姿勢」は、今も変わらず生きています。私の場合、異業種に移ったことで扱う対象や環境は大きく変わりましたが、物事の捉え方そのものは変わっていません。まず全体像を整理し、何が本質的な課題なのかを見極め、試行錯誤を重ねながら改善していく。その積み重ねが、結果につながっていくと考えています。化学メーカーでの経験は、専門知識そのもの以上に、そうした思考の型や粘り強さとして、今の仕事の土台になっています。

——最後に、これからの目標を教えてください。

田中：ビールには本当に多くの種類があって、作り手も、パッケージもさまざまです。一杯のビールの裏側には、多くの人関わっている。そうした背景を知って飲むビールは、格別だと思います。まずは、その魅力を少しでも多くの人に伝えていきたい。そのために店舗販売の強化や、ポップアップ・マルシェへの参加も継続して続けていきたいですね。そして何より、「研究」を続けたい。どうすればもっと楽しんでもらえるのか、どう伝えればクラフトビールの世界が広がるのか。質にこだわった研究を続けた先に、きっと最善の答えがあると思っています。その結果、誰かの生活を少しでも彩ることができたら、これ以上嬉しいことはありません。

Shop Info

クラフトビール専門ボトルショップ
“Hoppee”(ホッピー)



「ビールを飲んで、みんなをハッピーに！」
多摩川流域を中心に、全国のブルワリーから厳選したクラフトビールを取り揃えたボトルショップ。リラックススタイルの一杯から、特別な日のビールまで、ジャパニアンソムリエの店主が魅力的な1本をご提案します。

〒206-0802 東京都稲城市東長沼 516-2
ShareDepartment R-1 JR 南武線 稲城長沼駅 徒歩1分

[HP]



[Instagram]



[LINE]





Additional Time

BUILD UP!! #03

Published by Additional Time, LLC
February 2026
<https://additionaltime.jp>

本誌「BUILD UP!!」は、あらゆる業種で活躍する人たちが、何を土台とし、どのように今の自分を築き上げ、未来につなげるのかを尋ねるインタビュー媒体です。

Shop Info

〒206-0802 東京都稲城市東長沼 516-2
ShareDepartment R-3
JR 南武線 稲城長沼駅 徒歩 1 分
営業時間：13:00 ~ 19:00
定休日：火曜・水曜

Online Store

Additional Time Store
<https://additionaltime.net>

